

The Silence of Memory:

Encyclopedia of Selahattin in Orhan Pamuk's Silent House

Ryo Miyashita

This paper analyses the novel *Silent House* (1983) by the Turkish writer Orhan Pamuk, using Selahattin's *Encyclopedia*, a fictional book which appears in the novel. The novel consists of two main plots, "Current Events in 1980" and "Memories of the Past Century". Previous studies have focused on the former plot and evaluated it as a contemporary novel which strongly reflects the political situation in Turkey in the 1970s and 1980s. This paper article focuses on the latter plot, which has traditionally been regarded as a supplementary element of the bildungsroman. We have traced the four ordeals that befell *Encyclopedia*, and pointed out that the process of destruction of this imaginary book most closely represents both the century-long turmoil in the history of Turkish political and social thought, and Pamuk's view of Modern History of Republic.

記憶の沈黙：

オルハン・パムク『静かな家』におけるセラハッティンの『百科事典』をめぐって

宮下 遼

1. 『静かな家』について

作品概要

『静かな家』(Sessiz Ev)¹はトルコ人作家オルハン・パムク(1947-)が1983年に発表した長編小説であり、初作『ジェヴデト氏と息子たち』(1982)と同じく、オスマン帝国末期から現代に至る三代にわたる家族伝記としての性格を受け継ぎつつも、初作に比して1970年代から80年代にかけてのトルコの政治情勢を強く反映する。またファトマ、レジェブ、ファルク、メティン、ハサンという5人の主人公のおのおのが、一軒の屋敷を中心として自叙体で紡ぐ全32章から成る群像劇という作品スタイルは²、当時のトルコ語小説としてはやや珍しかったこともあり高く評価され、同じく自叙体群像劇の体裁を取った『新しい人生』(1994)、『私の名は赤』(1998)の成功の足がかりともなった。『静かな家』はこれまで政治性に富む同時代小説として評価されることが多かったが、出版から40年を経たいま、本稿では後述の「過去1世紀の記憶」というプロットを念頭に置きつつ、3世代を跨ぐ記憶の継承に深くかかわる架空書物『百科事典』(Ansiklopedi)を手がかりとしながら再読を試みたい。すでに各国語に翻訳されて久しい作品ではあるが、邦訳がないことに鑑み、ごく簡単に本作の粗筋を紹介しておく。

1980年夏、老婦人ファトマ・ダルヴンオールはイスタンブールのアジア岸郊外ゲブゼ市にほど近い架空の街ジェンネトヒサルの朽ちかけた木造邸宅に暮らしていた。夫セラハッティン、息子ドアンはすでに亡く、使用人のレジェブと同居している。90歳となりますます口数が減ったファトマであるが、例年のように3人の孫ファルク、ニルギュン、メティンの来訪を喜び、レジェブが孫たちに悪いことを吹き込まないかと心配もしている。三人の孫のうち長男のファルクは大学で歴史学を教える教師であり、妻との離婚を経て酒浸りの暮らしを送る。ジェンネトヒサルでの休暇に息苦しさを感じており、頻繁に屋敷を空けてはゲブゼへ史料調査に出かけている。長女ニルギュンは社会学を専攻する大学生であり、革命主義者を自任する左派として政治運動に傾倒する一方、祖母に対してもっ

とも献身的な心優しい女性である。次男のメティンはアメリカ文化に憧れ、裕福になるための方策を捜す高校生で、夜な夜な屋敷を空け遊び回るうち、富裕な友人の妹ジェイランに惹かれるが、彼女からは貧しい青年の一人としか思われず、その想いが実を結ぶことはない。そんな三人の孫は、それぞれに思惑を抱えつつも、体調の思わしくない祖母にイスタンブールへ越すよう説得を続けている。

一方、使用人のレジェブは、ファトマの夫セラハッティンと、農村出身の家政婦との間に生まれた双子の兄にあたり、生まれつきの小人という障害を抱えている。当然ながら、夫の不義の子でありファトマからは疎まれていたが、街には友人も多く職務に忠実で、実の父であるセラハッティンを慕い続けている。レジェブには先天的に片足の悪い宝くじ売りのイスマイルという弟がおり、語り手の一人ハサンは彼の息子である。ハサンの家は貧しく家族仲も良好とは言えず、彼は地元ジェンネトヒサルの高校に馴染めぬまま、柄の良くない友人たちが所属する理想主義者（Ülkücü、トルコ民族主義の一種）グループに身を置いている。幼馴染ニルギュンに想いを寄せるものの、右派グループの先輩たちからはことあるごとに左派の彼女を襲うようけしかけられ、それを防ごうと努めている。そんなある日、いざニルギュンに想いを告げると「変態のファシスト」と呼ばれ、激昂し彼女を殴り倒してしまう。ハサンは恐れをなしジェンネトヒサルを出奔、イスタンブールへ旅立つ。これと同じころ、屋敷ではいよいよ調子の悪いファトマをイスタンブールへ移す準備がはじめられるが、殴打を受けたニルギュンが屋敷に運び込まれ、レジェブの介抱の甲斐なく、あくる日に脳梗塞で死亡してしまう。終幕、屋敷の一階にはニルギュンの死を知り嘆き悲しむファルク、メティン、レジェブが集い、階上ではそれを知らない祖母ファトマがレジェブを呼びつけるが、彼は一向に姿を現さない。ファトマは腹を立てながら、いつものように物思いに沈むのであった。

2つのプロット：「現在の出来事」と「過去1世紀の記憶」

本書は五人の語り手によって紡がれる内省的な独白と回想が主調をなすため、物語の主筋が時間軸を前後し、分散的に語られる場面も少なくないものの、大別すれば1980年当時の「現在の出来事」と「過去1世紀の記憶」という2つのプロットを確認できる³。前者は右派の貧しい青年ハサンが左派のニルギュンへ寄せる恋心とその挫折、および政治闘争を冷笑しアメリカ文化に憧れる若者メティンが、ジェイランによりその貧しさゆえに拒絶されるといふ、二つの失恋を軸に展開する。これに対して後者は、レジェブが語るジェンネトヒサルの街の変化や、史家としてイスタンブール近郊の街々の歴史を掘り起こすファルク、そして帝国末期から共和国初期にかけての記憶を夫セラハッティンとの会話を介して回想するファトマら、三者の断片的な記憶によって構成され、本作の読解に必要な背景知識を補う形で読者に提示される。

当然ながら物語の主筋を成すのは「現在の出来事」である。1970年代、第二共和政下のトルコ共和国では右派（トルコ民族主義者、共和主義者）と左派（社会主義者）の各政党と、主にその下部組織や労働組合の構成員たちが激しい武力闘争を展開し、本書の物語の直後に起きる9月12日クーデターによって国防軍が政権を掌握し、2年にわたる軍政を敷いたのち民政移管を経て第三共和政が誕生することでようやく混乱が収拾された経緯がある。つまり、『静かな家』はトルコ史でもっとも濃密な政治の季節がクーデターによって終わりを告げた時期に上梓された作品なのである。それを示すように、本書の登場人物たちにはかなり明白な形で各種の政治思想の代弁者としての役割が課せられている。帝国末期の西欧化の進展によって無神論者を標榜するようになった祖父セラハッティン、共和国初期に生まれ育ち建国時の原初的なトルコ民族主義教育を受けつつも、その思想風土に迎合できずに育ったレジェプ、冷戦期（1945 -）、ないしは複数政党制導入期（1950 -）に生まれ育った作者パムクと同世代で、特定の政治思想に与せず、むしろ帝国期の伝統文化に関心を寄せるインテリであるファルク、国民の経済格差を憂え社会主義を支持するニルギュン、姉とは対照的に絶対的な同盟国アメリカの文化と資本主義を信奉するメティン、そしてオスマン帝国からトルコ共和国への連続性を体験しながらも、20世紀初頭にイスタンブールから配流の身の上となったため帝国期の伝統に盲従し、西欧文化／イスタンブール文化への抑え込まれた郷愁と憧憬を抱きつつも、過度な西欧化によって悪徳の地と化した故郷を断罪し続けるファトマなど、ダルヴンオール家はトルコの近代化の過程で生じた諸々の政治・社会思想的葛藤を1980年当時において象徴する一族として描かれる⁴。

出版当初は「現在の出来事」プロットの分析に重点が置かれ、二つの失恋を通して政治闘争に翻弄される若者たちの群象劇を描くことに成功した同時代小説ないしは政治小説という評価が大勢を占めたが⁵、のちにはモランによって思索的・批判的態度（Düşünselleştirici）という80年代作家（Seksenli Yazarlar、パムクを含め80年代にデビューした作家たちの総称としてよく用いられる）の特徴があますことなく顕在した作品として再評価されてもいる⁶。

これに対し、後者の「過去1世紀の記憶」というプロットに注目した分析は稀である。「過去1世紀の記憶」は全体として見れば、セラハッティンの口を借りて語られる東洋と西洋の思想的差異や、後者の停滞を浮き彫りにする形で展開するものの、批評家たちにはあくまで断片的な予備知識の羅列として受け止められ、前者のプロットの遠景を為す教養小説的な本書の一面を表すとされているに過ぎないのである⁷。そのためか、「過去1世紀の記憶」プロットにおいて登場人物たちの回想と並んで重要な役割を果たす書物群——ファトマの幼年期の幸福を象徴する『ロベンソン物語』（後述）、ファルクが文書庫で発見しイスタンブール郊外の歴史を掘り起こす手がかりとする架空の写本（手稿）『ブダクの

物語』⁸、そしてセラハッティンの『百科事典』など——に注目する研究は多くはない⁹。

2. セラハッティン『百科事典』とその消滅

『ロベンソン物語』の示すこと：記憶の再読性

前記のように本書は全編を通して五人の語り手の内省や過去の人々との会話という、言うなれば主人公たちの「声」(ses)を頼りに紡がれる点が構造的な特徴とされ注目されてきたが、そもそも本書の終幕は以下のような書物の力に立脚している。ニルギュンの絶命を知らぬまま寢床でイスタンブールを回顧するファトマは、帝国時代に高官シュクリュ・パシャ（架空の人物）のお屋敷へ馬車で遊びにいった娘時代の記憶を呼び覚ます。ファトマにとってイスタンブール時代最良の記憶である。そのお屋敷で年嵩の友人たちから西欧小説の訳本を語り聞かせてもらったファトマは、アレクサンドル・デュマ・ペール『モンテ・クリスト伯』やグザヴィエ・ド・モンテパンの作品に交じって、『ロベンソン物語』(Hikâye-i Robenson、ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』、ここで念頭に置かれるのは Şemsettin Sâmî によって 1880 年代に仏語版から訳されたオスマン語版であろう)を気に入り、シュクリュ婦人にねだって貸してもらったのだ。結局、シュクリュ・パシャの屋敷を再訪する機会は訪れず、『ロベンソン物語』もいつしか紛失してしまうのだが、ファトマはこう慨嘆する。

一番嬉しかったのは、あのとき手の中にあったあの本があれば、その日の慌ただしい出来事を家に帰ってからもう一度、体験できるだろうという予感があったことだ。(中略)あの一度きりの馬車行に舞い戻って人生をやり直すことはできないが、もしいまでも私の手許にあの本が残っていたなら、たとえそれが混沌として理解の及ばないものとしても、それを読み終えたときには腑に落ちなかったことや、あるいは生き方そのものを、もう一度理解したいと望んだときに、もう一回はじめから読み直すことだってできるのだ。そうじゃなくて、ファトマ?¹⁰

これまで登場人物たちの「声」によって進行してきたはずの物語は、その掉尾に至ってむしろ書物の発する「声なき声」(sessiz ses)に耳を澄ませることで記憶を再読するという可能性を、いまさらながらにファトマに発見させることで幕を閉じるのである。そして『ロベンソン物語』や『ブダクの物語』と異なり、本書に登場する書物群にあって唯一、再読の機会に恵まれず受け手のないまま消滅することを余儀なくされる書物が、セラハッティン・ダルヴンオール『百科事典』なのである。

『百科事典』の四つの挫折と消滅

『百科事典』の著者セラハッティン・ダルヴンオール(1881-1942)は、物語のちょうど100年前に生まれた医師であり、主要登場人物ファルク、ニルギュン、メティン、ハサンの祖父、レジェブ、イスマイルの父として、一族の祖に当たる。セラハッティンは、彼自身が教育を受けた19世紀末から20世紀初頭の社会思想を色濃く反映し、作者の言葉を借りれば「国家をただ文化の力によって劇的に変えることを試みる人」として描かれ、『百科事典』の執筆によってそれを試みることとなる¹¹。

三十年にわたりスルタン専制が敷かれ、近代化が急速に進展したアブデュルハミト2世期(1876-1909)に教育を受けたセラハッティンは、1923年にトルコ共和国が成立し名字が必要となった際にダーウィンの息子を意味するダルヴンオールを名乗ったほどの科学至上主義者であり、宗教を蔑視し無神論者であることを公言して憚らない。医師として生計を立てる彼は良家の子女ファトマを娶るものの、青年トルコ人革命によって専制が倒され、憲政が復活した第二次立憲政期(1909-1920)に入ると有力政治家タラート・パシャの不興を買ひ、帝都から追放される。配流の地となったイスタンブール近郊のジェネットヒサルでは、屋敷の洗濯室に診療所を開設するものの無神論者であるという噂が邪魔をして患者は訪れず、セラハッティンとファトマはすぐに困窮する。やがて息子ドアンが生まれると、一家はファトマの嫁入り道具を売り払っては糊口をしのぐようになるが、セラハッティンはラク酒に浸る日々を続けながら、自分たちの窮状をイスタンブールの有力者たちの無知に帰し、名誉回復の唯一の手段として『百科事典』執筆にますます没頭し、ファトマとの隔意は埋めがたいものとなっていく。

セラハッティンの実存意識の核をなす、一見すれば過激とも思われる科学至上主義は、作品内ではファトマによって無神論者としての側面が強調されるあまり、彼を異常な人物に仕立て上げるが、20世紀初頭のトルコにおける思想潮流に鑑みればさほど珍しい態度でない点には留意が必要である。なぜなら、セラハッティンの無邪気な思想は、汎イスラーム主義が国策的に標榜された19世紀末から20世紀初頭に、これに反発して憲法と帝国議会の復活を期し——そして皮肉なことに志を同じくするセラハッティンを追放することともなる——青年トルコ人たちによって広く支持された俗流唯物論(Vulgärmaterialismus)そのものであるからだ¹²。この点に関しては、「そう、神はもういないのだよ、ファトマ。ただ科学があるばかりなのだ」と繰り返し唱える無神論者としてのセラハッティンの人格には¹³、妥協なき科学主義を信奉した国父ムスタファ・ケマルの戯画化された人格の一部が託されているとする文学研究者クルチの意見も傾聴に値するだろう¹⁴。

いずれにせよ、19世紀後半から20世紀初頭のイスラーム世界にあって、もっとも欧化の度合いが著しかったイスタンブールのムスリム選良の思想傾向をあまざり代弁するセラハッティンは、東方世界の近代化と知的革命を期す全48巻に及ぶとされる『百科事典』

の執筆を自らの使命と考えるに至る¹⁵。その執筆は、セラハッティンが「彼ら」と呼ぶ西欧人たちの百科事典を参照しつつ、必要に応じて書き足しや、項目追加を行う形で進められていく。ただし、『百科事典』が書物としてまとめられる機会はずいに訪れないため、その実態はセラハッティンが書き溜めたアラビア文字、のちにはラテン文字が入り混じった項目カードの山に過ぎず、それも以下のような四つの挫折を経て消滅する運命にある。

第一の挫折は、1910年代のセラハッティンの政治的失脚とジェンネトヒサルへの蟄居である。出版社が集中する帝都を離れたことで『百科事典』出版は困難になると同時に、その執筆は妻ファトマとの隔意を生み、セラハッティンの権威の拠り所となるはずであったこの架空書物は、むしろ家族の不和の種と化すのである。

第二の挫折は1923年のトルコ共和国の建国である。セラハッティンが啓蒙の対象としてきた民衆は「臣民」から「国民」となり、国父ムスタファ・ケマルの号令一下、トルコ民族主義に基づく教化を受けはじめる。しかし、この時代の「教化」はセラハッティンやムスタファ・ケマルが標榜した科学主義とは異なり、宗教と唯物主義の融合・折衷的解釈を試みた点でより現実的であった思想家アブドゥッラー・ジェヴデト医師 (Abdullah Cevdet, 1869-1932) などの影響下で進展する。劇中、セラハッティンがジェヴデトを手厳しく批判することからも窺えるように、あくまで宗教と科学を峻別し、後者を上位に置きながら世界の再解釈を試みてきたセラハッティンの『百科事典』の理想と、世間における近代化、世俗化は乖離し、『百科事典』はますます時代にそぐわない書物となっていく。

第三の挫折は1928年の文字改革である。アラビア文字からラテン文字をもととする新トルコ文字への移行が行われて以降、アラビア文字で書かれたトルコ語／オスマン語書籍の取り締まりが開始される。これによって、それまでオスマン語とアラビア文字で書き溜めた『百科事典』の価値は大きく毀損し、のちにレジェプが「古い文字なので読めなかった」と回想するように¹⁶、多くの者にとっては読むことさえ叶わない無用のテキストと化してしまうのである。

かくして『百科事典』は、後世への知識の伝達と啓蒙というセラハッティンが企図した役割を担う代わりに、彼自身が酔いどれの貧乏医師以上の存在であることを家族に示すための、ごくごく個人的な営みへと変貌する。いみじくもセラハッティンはこう口走る。

ファトマ、彼らは思い知ることだろうよ。48巻より成る私の百科事典にとって私を措いてほかに、つまり神めいた (tanrısal) ないがしかがそこにあるとすれば、それは私を措いてほかにないのだと。そうだ、20世紀に至ってこのセラハッティン博士が、どうして“彼の方”(“O”)に代わって全ムスリムの新たな神になれないなどということがあると思うんだね?¹⁷

読者を得られぬまま書き続けられる『百科事典』はいつしか、セラハッティン自身が「全ムスリムの新たな神」として恣意を振るう個人の神話へと異形化するのである。そして1942年、セラハッティンの死の4ヶ月前、『百科事典』消滅の予兆が、ほかならない彼自身の口から語られる。“Ö”の項目を執筆していた彼は、唐突にファトマの部屋を訪れ、興奮と酩酊に任せ、東方世界において自分が初めて死(ölüm)の本質を発見したのだとまくし立てはじめるのである。この一週間、セラハッティンは西欧世界には死にまつわる書物が無数に存在するのに、イスラーム世界には類書が少ないという差異の解釈に悩んでいたが、その晩、いつものように新聞の死亡欄を眺めていて以下のような考えに至ったのだという。

虚無だ！ そう、虚無だよ！（中略）神(Allah)や天国、地獄が存在しないことに鑑みれば、死のあとにはただなにもない、が存在せねばならない。虚無と私たちが呼ぶもののみが存在するんだ。空っぽの無のみが！¹⁸

虚無を存在に先行する始原と見なそうとするセラハッティンの発見は、いかにも皮相的だが、『静かな家』に続く『新しい人生』、『黒い本』における作者パムクのイスラーム神秘主義への関心を勘案するならば、「無」を神の一部へ帰するイスラームの思想風土にあって周囲の批判に抗い続けて無神論を信奉したセラハッティンが、結局は無＝神の中へ自我消失(fenâ-fi'llâh)するという皮肉な構図を炙り出すことも許容されるように思われる。つまり、セラハッティンという帝国末期に西洋的(Avrupaî)知識人の学究生活は、実のところ戯画化されたイスラーム神秘主義者の道程をなぞるようにも見えるのであるが、これに関しては稿を改め論じることとしたい。

いずれにせよ作品内における虚無の発見はあくまでファトマの理解の限界によってひどく皮相的なものとして描かれ、それはセラハッティンの死後に『百科事典』を見舞う第四の挫折、すなわちその物理的消滅を言い当てる役目を負う。虚無の発見の七ヶ月後、死後三ヶ月目にして夫の書斎に足を踏み入れたファトマによって『百科事典』の項目カードや遺稿はストーヴにくべられてしまうからである。

大きく無骨なストーヴの蓋を開けて、中にそれらを詰め込んだ。燐寸を擦って少しするとストーヴは、(事典の項目)カードも原稿も新聞も、セラハッティン、あなたの罪をきれいに飲み込んでしまった！ あなたの罪が無に帰していくたび、私の身体はあなたかくなっていく。(中略)次々とそれらを読み、嫌悪のあまりにストーヴの口の中へ放り込んで暖を取ったものだ。どれくらい読んで、どれくらい捨てたのか思い出せないほどだ¹⁹。

実はこうした『百科事典』の喪失を危惧したセラハッティンは、ほんの一部とはいえ項目カードを息子であるレジェブに託している。レジェブもまたファトマの詰問を躲してそれを隠匿するものの、「古い文字」のため読めないそれは、彼にとって父の形見としての価値しか持ちえず、『百科事典』はファトマのセラハッティンへの断罪めいた復讐によって、その創造者の真の意図や価値が汲み取られることのないまま灰燼に帰すのである。

3. 記憶の沈黙

1980年代初頭というトルコ史の節目に上梓された『静かな家』の特徴は、近代化が加速度的に進行した19世紀前半以降のオスマン帝国、そしてトルコ共和国の人々が経験した政治的、思想的な流転と、それに伴う混乱をダルヴンオール一族に託して描きながら、政治・社会思想を託されたおのおのの登場人物が意識・無意識を問わず相互理解の困難さに直面し、葛藤するさまを描出したところにあるだろう。1980年夏の終わりに終幕を迎える本書にあって、ダルヴンオール家の祖セラハッティンの生誕年が1881年とされるのは偶然ではない。なぜならそれは、一族の祖の政治的挫折によって生じた家族の不和が、三世代を経てなお解決を見ることなく、それどころか政治闘争の名を騙る失恋への怒りという身勝手な暴力を引き受けた孫娘ニルギュンの死へ帰結し、ついに癒されることがなかった百年におよぶトルコの政治的、思想的葛藤をも、示唆するからである。

翻って上梓から——そして9.12クーデターから——40年を経たいま、セラハッティンの『百科事典』に着目して本作を再読すると、この架空書物の無残な末路が、1980年を近代化と政治・社会思想の混乱の極点にして終局と捉えようとするパムクの世代の時代意識を強く反映していたことにも気が付かされる。『百科事典』のごとき知的価値と個人的記憶が混然一体となって宿る物言わぬ事物 (eşya)、平たく言えば思い出の品々の脆さと価値については、のちにパムクが『黒い本』(1990)で試み、とくに『無垢の博物館』(2008)においてテーマの中心に据えたところである²⁰。そして『黒い本』や『無垢の博物館』におけるそれらの事物は、紆余曲折を経ながらもその価値を知る者に見出され、拾い上げられるという救済を得たのに対し、本書の『百科事典』は、唯一の読者となったファトマによって断罪され、火にくべられた。19世紀末から20世紀初頭において世界そのものの総合的再解釈を企図したセラハッティンの『百科事典』の消滅は、1980年のクーデター以後の文学をポストモダニズム文学と呼ぶこととなるこの国の人々が、政治の季節の終局にあって記憶を伝えるべき肉声も、書物の発する声なき声も、そのいずれもが虚無へ吐き出され続ける声なき家と化した国に暮らした沈黙の記憶を、物語るようにも思われるのである。

注

1. 本稿では Pamuk, O. *Sessiz Ev*, İstanbul, İletişim Yayınları, 2006(1. ed., 1983) に拠った。以下、脚注内では *SE* と略記する。なお、本書のタイトルは『静かな家』と訳されるのが一般的であるが、原題にある *sessiz* は「音のない」、「声のない」という両義性を孕むことも付記しておく。
2. 後年、作者はヴァージニア・ウルフ『灯台へ』の影響と明かしている。Pamuk, O. *Saf ve Düşünceli Romancı*, İstanbul, İletişim Yayınları, 2011, p. 140.
3. マクガーハは「表層」と「深層」と評する。McGaha, M.D. *Autobiographies of Orhan Pamuk: The Writer in His Novels*, Salt Lake City, The University of Utah Press, 2008, p. 71.
4. Kılıç, E. “Sessiz Ev’in Sesleri,” in *Orhan Pamuk’un Edebi Dünyası*, N. Esen and E. Kılıç(eds.), İstanbul, İletişim Yayınları, 2008, p. 130.
5. Kırkoğlu, S. R. “Bir Zaman Romanı Sessiz Ev,” in *Orhan Pamuk’u Anlamak*, E. Kılıç(ed.), İstanbul, İletişim Yayınları, 2006, p. 67.
6. Moran, B. *Türk Romanına Eleştirel Bir Bakış 3*, İstanbul, İletişim Yayınları, 1994, pp. 71-72.
7. Cengiz, S. “Orhan Pamuk’un Romanlarında Doğu-Batı İkilemi,” *Hacettepe Üniversitesi Türkiyat Araştırmaları*, No. 12, 2010, pp. 69-70.
8. 『ブダクの物語』は、のちにパムクの別作品『白い城』の語り手を務める史家ファルク・ダルヴンオールを「あらゆる知識を、そのいかなる重要性にも価値にも優劣をつけずに一書に仕立て」、「歴史を、いやそれどころか人生をありのままに言葉にする方法などないのだ」という知見へ導く重要な架空書物である。ここに *Veba Geceleri*(2021、『ペストの夜』) において試みられた「歴史と小説の相半ばする形」という、パムクなりの歴史小説の叙法に対する一つの解へ至る思索の萌芽を見ることもできそうだ。SE, p. 163; Pamuk, O. *Veba Geceleri*, İstanbul, Yapı Kredi Yayınları, 2021, pp. 12-13.
9. 本稿で主に取り上げた架空書物セラハッティンの『百科事典』に関して言えば、第二次立憲政期のオスマン知識人の科学観の限界を象徴すると見なすデミルや、この時代に特有の楽観的な科学主義の産物として読み解くウウルルとバルクの見解が見られる。いずれも作者セラハッティンと『百科事典』を同一視するため、『百科事典』そのものの思想史的背景はさほど重視されていない。Demir, F. “Orhan Pamuk’un Romanları üzerine bir Araştırma,” *Doktora Tezi, Yüzcüncü Yıl Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü*, 2011, p. 129; Uğurlu, S. B. and Balık, M. “Sessiz Ev’in Hayaleti: Gündük Bir Aydınlanma Projesi,” *Turkish Studies*, Vol. 4, No. 8, 2009, p. 2325.
10. SE, p. 337.
11. セラハッティンのモデルは、ベルリン留学をしていた法務官僚であるパムク祖父であり、彼が婚約中の祖母に書き送った手紙は、セラハッティンがファトマに与える授業じみた会話を彷彿とさせるという。Pamuk, O. *Öteki Renkler*, İstanbul, İletişim Yayınları, 2011, p. 142. これにくわえ、パムクも度々参照する『イスタンブール百科事典』を独力で執筆した——死亡により 11 巻で未完に終わる——歴史研究者コチュ (Reşat Ekrem Koçu, 1905-1975) も重要な影響を与えている。
12. 単純化された唯物論の概念と科学主義、ダーウィニズムを融合させた粗削りな信念と呼ぶべきものであり、科学こそを万能薬と見なすこうした態度は、トルコにおいては国父ムスタファ・ケマルを筆頭に青年トルコ人や、のちの共和国首脳に大きな影響を残したという。ハーニオール, M. シュクリュ. 『文明史から見たトルコ革命—アタテュルクの知的形成』新井政美 (監訳), 柿崎正樹 (訳), みすず書房, 2020, pp. 48, 50.
13. SE, p. 26.
14. Kılıç, *op. cit.*, p. 144.

小特集 1

15. 劇中 54 巻に及ぶ可能性が示唆される箇所もある。SE, p. 24.
16. SE, p. 118.
17. SE, p. 142.
18. SE, pp. 296-297.
19. SE, pp. 217-219.
20. 宮下遼「オルハン・パムク『無垢の博物館』における破滅と慰撫：イスタンブールの都市記憶と事物の愛の関連性について」世界文学会, 「崩壊と世界文学」第 1 回連続研究会, 於オンライン, 2021 年 12 月 12 日。

参考文献等

- Cengiz, S. (2010). "Orhan Pamuk'un Romanlarında Doğu-Batı İkilemi," *Hacettepe Üniversitesi Türkiyat Araştırmaları*, No. 12, pp. 63-88.
- Demir, F. (2011). "Orhan Pamuk'un Romanları üzerine bir Araştırma," Doktora Tezi, Yüzüncü Yıl Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü.
- Kılıç, E. (2008). "Sessiz Ev'in Sesleri," in *Orhan Pamuk'un Edebi Dünyası*, N. Esen and E. Kılıç(eds.), İstanbul, İletişim Yayınları, pp. 125-135.
- Kırkoğlu, S. R. (2006). "Bir Zaman Romanı Sessiz Ev," in *Orhan Pamuk'u Anlamak*, E. Kılıç(ed.), İstanbul, İletişim Yayınları, pp. 66-70.(1. ed., 1999.)
- McGaha, M.D. (2008). *Autobiographies of Orhan Pamuk: The Writer in His Novels*, Salt Lake City, The University of Utah Press.
- Moran, B. (1994). *Türk Romanına Eleştirel Bir Bakış 3*, İstanbul, İletişim Yayınları.
- Pamuk, O. (2006). *Sessiz Ev*, İstanbul, İletişim Yayınları.(1. ed., 1983)
- (2011). *Öteki Renkler*, İstanbul, İletişim Yayınları.(1. ed., 1999)
- (2011). *Saf ve Düşünceli Romancı*, İstanbul, İletişim Yayınları.
- (2021). *Veba Geceleri*, İstanbul, Yapı Kredi Yayınları, 2021.
- Uğurlu, S. B. and Balık, M. (2009). "Sessiz Ev'in Hayaleti: Gündük Bir Aydınlanma Projesi," *Turkish Studies*, Vol. 4, No. 8, pp. 2307-2339.
- ハーニオール, M. シュクリュ . (2020). 『文明史から見たトルコ革命——アタテュルクの知的形成』新井政美 (監訳), 柿崎正樹 (訳), みすず書房 .
- 宮下遼「オルハン・パムク『無垢の博物館』における破滅と慰撫：イスタンブールの都市記憶と事物の愛の関連性について」世界文学会, 「崩壊と世界文学」第 1 回連続研究会, 於オンライン, 2021 年 12 月 12 日。